おすすめの一冊

島田裕巳『[増補版]神道はなぜ教えがないのか』

とうとう満70歳になってしまうので、世間の皆様同様何かしらの感慨はある。老化は気力・体力・知力の低下を招き、古稀などという言葉を見ると、やれやれもう先はあまりないなと生来能天気な私でも感じざるを得ない。この心境は興味を引くものや読書の分野などにも当然影響し、最近は名所旧跡中でもなぜか仏教寺院よりむしろ神社により興味を持つ。おそらく仏教伝来からたかだか1500年、神道は間違いなくさらに歴史が古いためであろうか。

ただ少年期には実家が京都・奈良に比較的近く、中学生にもなれば友人と日帰りではあるが時々両地を訪ねていたので、その刷り込みも少なからずあるのだろう。しかし感激する仏像は数多くあっても神像は数自体が本当に少なく、また伊勢神宮のように式年遷宮などがあると古式ゆかしい建造物が古社に常にあるとは限らない。それでも周囲が鬱蒼(うっそう)とした室生龍穴神社・太秦木嶋坐天照御魂神社(このしまにますあまてるみたま)(蚕の社)・鹿島神宮の三社には、悪い意味でなく何やら得体の知れないただならぬ何かがここには潜んでいるという感覚を、私のように鈍い人間でも抱かざるを得ないのだ。一方で単なる個人的印象ではあるが、歴史は古くても大神(おおみわ)神社や出雲大社や伊勢神宮などには潜んでいないと感じる。これらはたぶん庶民がお参りに行く場所、いわゆる受付所として特化されており、その何かが存在する場所ではない気がするからであろう。

そこで一冊、島田裕巳著『[増補版]神道はなぜ教えがないのか』というわけである。なお私の読んだものは2014年に出版されたベスト新書初版第七刷であるが、最近絶版になり、2023年9月に同タイトルの増補版で育鵬社から単行本になっている由である。図らずも初詣のタイミングの新年号掲載には適切な選択になったかもしれない。

昔からそうではないかと思ってはいたが、神道にははっきりした開祖も教義もないそうだし、いわゆる御神体といっても山であったり、岩であったりする。たぶんそもそも今では全く存在すらしない場合も多々あるのだろう。そういう茫漠とした概念だからこそ継続性が担保され、庶民にさしたる心理的抵抗も受けずに連綿と続いてきたのであろう。唯一神でなく、誰から誰と誰が生まれて……など個性的でたくさんいらっしゃるのも気に入っており、八百万の神々という概念も自分にはしっくりとくる。さしずめ多様性社会の尊重の先駆けでもあるのだろう。

[増補版]
神道はなぜ教えがないのか
島田裕巳著
育鵬社

松山 健
まつやま たけし
公立福生病院 企業長(管理者)。1980年慶應義塾大学卒業。小児科医でサブスペシャリティは小児腎疾患。元日本小児科学会専門医・指導医、元日本腎臓学会専門医・指導医、現日本夜尿症・尿失禁学会評議員。1987年から東京都国保連福生病院(2001年公立福生病院と改称)に勤務。本会学校保健専門委員(腎臓病)。